

天地

ネットワーク テーブル 466号

発行：天地シニアネットワーク：2018・3・6

TENTĪ TODAY <東京の下町><浅草雷門・人力車><都電荒川線>		1
会員の広場	<浅草の人力車>	2
連載作品		2
随 想	天のわざ、地のほまれー地球を測れ、宇宙を測れ 41. 磁気をつくりだすもの	伊那 闊歩 2
随 筆	「1950年代の僕と街」(四) 田舎町苧田の暮らしー2ー 「自転車の三角乗り」「圧倒的な美しさの苧田の夜空」	臺 一郎 6
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語(39) 哲学の道5・「若王子神社」「大豊神社」	大竹 漢洲 8
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」	1 1
事務局		1 2

TENTĪ TODAY

台東区から荒川区への拠点移動が完了しました。東京の下町という、<台風が来ると、水が出るところ><ごみごみしたところ>というのの方の未だ残るイメージかと思いますが、古き良き時代の残影は、むしろ落ち着いて住みたくなる街と感じさせます。

といっても、あちこち古い家を壊して建築ブーム、商店主は通いが普通、小さな飲食店では、<従業員が病気><従業員が不足>で「しばらく休業」の張り紙、近くのコンビニでは、日本語学校に通う外国人の若者が大勢たむろして喫煙、店員も外国人なので関心なし、古い街も荒れてきました。

古都、奈良も多かったですが、浅草雷門界隈の人力車、非常に増えているようです。人力車は、明治維新直後に出現、あっという間に全国に広がり、100万台近く売られたそうです。馬より便利というのがその理由の一つ、外国人にも評判で、結構輸出もされたとのこと。人が動力となる車、昔も、今も外国人には珍しいようです。

人が人を運ぶ、日本人には受け入れがたいイメージですが、戦後、輪タクが大流行し、人力車はそれにつながるイメージを残すので、受け入れがたいのかも知れません。外国人、特に若者が多く乗るところを見ていると、アニメの時代、日本の古い文化の残滓として、彼らに人気があるのかもしれない。外国人でいっぱい浅草、最近の下町風景の一つです。

1964年の東京オリンピックの時に、都電の殆どが姿を消しましたが、現在唯一残っているのが<都電・荒川線>です。最近「東京さくらトラム」と称され、「三ノ輪橋」から「早稲田」まで一時間弱で運行されています。

町屋一早稲田間を時々利用しますが、王子、大塚とJRに接し、東京メトロにも接するのでいつも混んでいます。「飛鳥山」「滝野川」「庚申塚」「鬼子母神」「雑司ヶ谷」「学習院下」など、郷愁を誘う駅名が多くあり、座って50分、気分は良好です。最近、車体を一新、スマートになりましたが、相変わらず、『チンチン』と鳴らして走っています。時間と暇のある方どうぞ。

会員の広場

人力車、維新後車夫として働いた中には、旧幕臣が多かったそうです。戊辰戦争後、徳川慶喜が70万石に減封されて静岡に移住したとき、随行した旧家臣は約1万人、御家人以下の下級武士はほとんど江戸に取り残されました。その結果、江戸の治安は乱れ、生活できない士族を新政府は、不要となった旧幕府の御料牧場へ開拓民として移住させました。

しかし、農地を作り、収穫を得るには時間がかかり苛酷な環境に耐えられず、逃げ出す人が続出、江戸へ舞い戻る人が多かったようです。そういう人たちにとっては、人力車の車夫は、恰好の仕事だったに違いありません。

旧幕府にとって、軍馬の確保が一番の重要事項でしたから、広大な牧場を有し現在の千葉県に多くありました。

小生の家は柏、北総になりますが、裏の公園との仕切りの段さは、馬の通る道で、以前は船橋に近い馬込沢の方まで続いていたそうです。小金牧の一端だったことは間違いないようですが、とてつもない広さです。

南総にも牧場はあり、江戸に残された大勢の旧士族をとりあえず受け入れるのは、さほど難しくは無かったと思われます。(津田)

連載作品

天のわざ、地のほまれ
—地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

41. 磁気をつくりだすもの

鉄を引きつける不思議な力をもつ石(磁鉄鉱、マグネタイト)が、この地上に広く分布して存在するという事は、記録によれば(*1)古代ギリシャの時代から知られていたらしい。昔から世界中の多くの人々が磁石を知っていたのだ。中国では3世紀に「指南魚」という一種のコンパス(羅針盤)が作られていた。指南魚とは魚の形に彫った木片に棒磁石を埋め込んだもので、これを水面に浮かべればその口が南方を向く。いまや指南魚は忘れられたものの「指南」という言葉は現在ものこっている。羅針盤は13世紀にヨーロッパに伝わって、ポルトラーノ海図等、精密な海図の作成にたいへん役立った

という。中国人は3世紀にすでに地球が巨大な磁石であることを知っていたのであろうか。

指南魚の口の向く方位が南なので、木魚に埋め込まれた棒磁石の南端をS極(South)と定める。すると尻尾にある端はN極(North)となる。棒磁石や磁針の北極をむく先端をN極と定めるのだ。ところで、磁石のN極とS極は引き合い、同極同士は反撥するのであるから、磁石のN極は地球のS極の方に向いているわけだ。磁石のS極は地球のN極の方に向いている。じつは地球を磁石とみれば北極はS極、南極はN極なのである。

磁石には常にN極とS極があって、これからN極だけを、あるいはS極だけを分離して取り出すことは決してできない(*2)。磁石をいくら小さく切り刻んでもその細切れに必ずN極とS極がペアになっているのこっている。したがって、電気素量に対応する磁気素量のようなものはない。それゆえ、N極とS極の間に働く力を測ろうにも(N極はS極のシッポをもっているので)簡単にはいかないが、電荷に対応する磁荷というものを想定してその強さを決めることはできる。電気量の単位クーロン(C)にたいして、磁気の強さの単位をウェーバ(Wb)という(ウェーバの厳密な定義についてはまた後程)。

磁石のN極とS極のあいだにはたらく(引)力は、電荷にたいするクーロン力に似ている。そこでもう一度、クーロン力について数式を用いて最初から復習しておこう。真空中で電気量 q_A 、 q_B (クーロン)に帯電したふたつの微小な物体A,Bが距離 r (メートル)はなれて置かれているとき、これらの間にはたらくクーロン力 F は

$$F = \xi \frac{q_A \times q_B}{r^2}$$

で与えられる。ここで、比例定数 ξ はクーロン定数とよばれ

$$\xi = 9.0 \times 10^9 \text{ [N} \cdot \text{m}^2/\text{C}^2\text{]}$$

その(組み立て)単位はすこし複雑だが

$$[\text{N} \cdot \text{m}^2/\text{C}^2] = [(\text{ニュートン}) \times (\text{メートル})^2 / (\text{クーロン})^2]$$

となっている(*3)。ここまでは数式の羅列なので、実感を得るために数値計算を試みよう。 $q_A = q_B = 1$ (クーロン)、 $r = 1$ (メートル)としてみると

$$F = 9.0 \times 10^9 \frac{1 \times 1}{1^2} = 9.0 \times 10^9 \text{ N}$$

90億ニュートン! リンゴ1個にかかる地球の重力が約1ニュートンであったからこれは途方もなく強い力である。つまりこれは電気量が1クーロンに帯電した物体たとえば小型のカミナリ球(*4)のようなものがふたつ1メートルの距離まで近づいた時に両者のあいだに働く力の大きさなのだ。

ここで視点を点Aにうつせば、A点にある単位電荷が受けるクーロン力の

大きさは

$$E = \xi \frac{q_B}{r^2} = \frac{F}{q_A}$$

と書けることがわかる。ただし、 $r = 0$ ではないとする。あるいはこれを

$$F = q_A E$$

と書いて、 E を A 点における**電場**（**電界**）という。当然 B 点での電場は、 A 点の電場とは異なる。電場は位置（座標）の関数として与えられる。

真空中で距離 r メートル離れたふたつの磁極間にもクーロン力に似た力

$$F = \eta \frac{m_A \times m_B}{r^2}$$

がはたらく。ここで m_A , m_B (ウエーバ) は各磁極の強さである。比例定数 η は磁気力にたいするクーロン定数のようなもので

$$\eta = 6.3326 \times 10^4 \text{ [N} \cdot \text{m}^2/\text{Wb}^2 \text{]}$$

で与えられることがわかっている。真空中で各 1 ウエーバの磁極を互いに 1メートル はなしておいたとき、各磁極がうける力の大きさ F は

$$F = \eta \times \frac{1 \times 1}{1^2} = 6.3326 \times 10^4 \text{ N}$$

となり、これは 6 トンの物体が受ける地球の重力に相当する。空間の点 A におかれた磁極 m_A がうける磁力が

$$F = m_A H$$

と書けるとき、 H を A 点における**磁場**（**磁界**）という。磁場 H は 1 Wb の磁極が A 点で受ける力そのものである。

ここまでのところ、電気と磁気は並行して説明できるように思われる。電場 E に対応して磁場 H があり、電荷 q (クーロン) に対応して磁荷 m (ウエーバ) が定義できる。磁場 H は (電場 E も) 実はベクトル量なので大きさと向きをもっている。その向きを繋いでゆけば磁力線ができる。磁石の上に鉄粉を散布した紙片をのせ、軽く紙片をたたけば鉄粉が整列して磁力線を見ることができる。地球を磁石として見れば、北極に S 極があり南極に N 極があるので、地球外の磁力線の向きは fig.1 と fig.2 同じである。地球内部ではどうか。

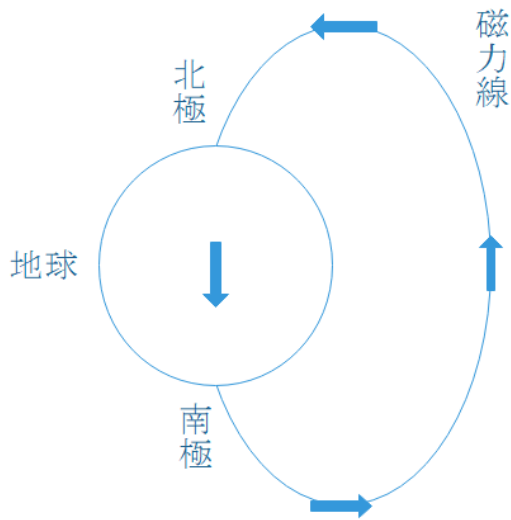


fig. 1

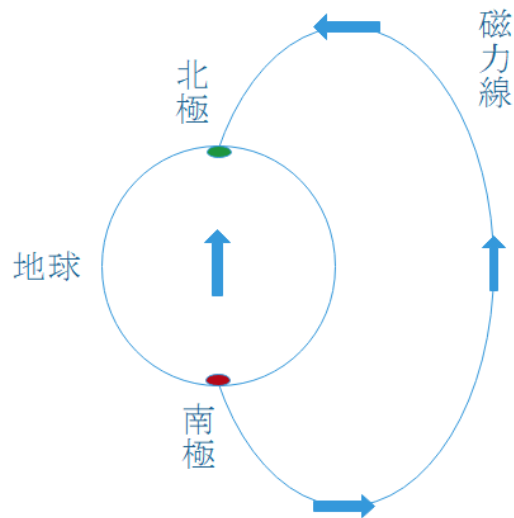


fig. 2

もし地球の北極に（磁石の）S 溜まり（fig.2 の緑）のようなものがあり、南極に N 溜まり（fig.2 の赤）のようなものがあるならば、磁力線は地球内部でも南極から北極に向かうはずである（fig.2）。現実には、磁極溜まりのようなものはなく、北極の S に近づくと磁針は真下に向き、そのまま地球に潜れば磁針の向きは変わらず地球の中心に向かうのだ（fig.1）。さらに磁力線に沿って進めば南極の N から地球外に出る。N において磁針は天に向いている。地球の磁力線は巨大なループを描いている。このループこそ磁気の正体なのだ。このようなループは束になって地球を貫いて無数に出ていると考えられる。ある面を貫く磁気ループの束（磁束という）をその面の面積で割ったもの、つまり単位面積あたりの磁力線の束を「**磁束密度**」といい、 B で表す。磁場 H よりも磁束密度 B のほうを基本量と考えるのだ。 B の単位はテスラで T と書く(*5)。その1万分の1を**ガウス**といい、 $1 T = 1 \text{ Wb}/m^2 = 10,000 \text{ ガウス (G)}$ となっている。なお、磁場は磁荷を考慮することなく、厳密に定義することができる。その方法については次回において考えたい。電場 E についても「**電束密度**」 D を定義することができるが、**電気**については、**電場 E** の方を基本量と考える。

磁束密度 B は磁場 H によって

$$B = \mu H$$

と書き表され μ を透磁率という (*6)。空気や木材、水、コンクリート、アルミニウム、銅などの透磁率は真空の透磁率と変わらないが、鉄の透磁率は真空のその 5,000 倍～200,000 倍もあり、鉄の中を通る磁束密度が飛躍的に増強される。電磁石の磁芯に鉄が使われる理由がそこにある。一方、超伝導体は透磁率がゼロなので、超伝導体のなかには磁束は入りこめず、排除されるのだ。超伝導体とは、電気抵抗がゼロの物質のことである。

電束密度 D は電場 E によって

$$D = \varepsilon E$$

と書き表され、比例係数 ε を誘電率と呼んでいる (*6)。電束密度は一定に保ち電束が通過する物質をいろいろ変えてみる。空気の誘電率は真空の誘電率とほとんど変わらないが、水の誘電率は真空のその 80 倍にもなる。すると水中の電場 E は真空中のその 80 分の 1 に弱まるのだ。ガラスや雲母など直流電流を通さない絶縁体を誘電体とも言うが、誘電体に電場をかければ誘電体内部の電場は空気中のそれより弱まる。つまり、誘電体は電場を弱めようとするのだ。鉄や銅など電気を通す金属の中では、多くの自由電子たちが動きまわり、これに電場をかけた時、自由電子たちは金属内部の電場がゼロになるような隊形をとる。つまり、金属の誘電率は無限大であると解釈できる。

(*1) プラトン『イオン』には、磁石についての記述があるらしい。ルネッサンス期の英人医師 W. ギルバート (1544-1603) は磁気研究の先駆者とされていて、かれの著書「磁気論」には、地球が大きな磁石であること、地球の中心は鉄でできていることが書かれているという。

(*2) この事実は上記ギルバートの「磁気論」に指摘されているという。単独に N 極あるいは S 極だけを持つ磁気単極子 (モノポール) が存在するかもしれないということが言われているが、いまだにモノポールは発見されていない。もし発見されたならば、電磁気学の基礎方程式に修正 (電磁気学の大改革) が必要となる。

(*3) 定数は数学では、円周率 π とか自然対数の底 e とかただの数であるが、物理・化学の定数は単位やそれらの組み合わせ次元など「組み立て単位」を持つ。クーロンの法則をこの単位だけに着目して計算すれば、

$$F \text{ の単位} = [N \cdot m^2 / C^2] \times [C^2] \div [m^2] = [N]$$

となって力の単位は $[N]$ であることがたしかめられる。

(*4) 銅線の中を電気が流れるとき、大量の電子が移動するのであるが、銅原子の原子核中の陽子が電気を中和していて、クーロン力は銅線の外には及んでこない。カミナリのように、空気中に数千万ボルトの電位差が発生した場合、むき出しの電子の塊が空気を切り裂いて放電がおこる。ところが、空気の電気抵抗が莫大であるために、電流としてはたいしたものではなく、落雷すればせいぜい立ち木を切り裂くぐらいのものである。たとえばゴルフボール大の電子の塊が生じたとしても、一瞬のうちに電子同士の反発力によって塊は雲散霧消してしまうのだ。

(*5) 地磁気の強さは東京で 0.45 ガウス、病院の MRI は 1.5 テスラ、世界最強の磁石ネオジムの磁力は 1.5 テスラ、ピップエレキバン 0.18 テスラであるという。

(*6) 真空の誘電率、透磁率はそれぞれクーロン係数 ϵ 、 η と密接な関係がある。そのことについては、また後の回で考えることとする。

随筆風「1950年代の僕と街」(四) 臺 一郎

田舎町荊田の暮らし-2-

「自転車三角乗り」

昭和 30 年頃の荊田町は人口が少ないだけでなく、子供だった僕が目から見ても小樽市に比べて貧しい家庭が多かった。僕が転校した町立小学校は、クラスの男子生徒 26・7 人のうち、7~8 人は一年中同じ小学生用の学生服を着ていた。また、校舎内は上履きに履き替えるのが校則だったが、上履き専用の靴を買えないために、裸足でいる子供が結構いた。

彼らは校舎内のトイレに行くときも裸足で行く。男子トイレはチューリップタイプの便器が何個も並んでいて、その手前の下に板のすのこが敷いてあった。すのこの板はいつも子供達が用を足すたびに跳ね飛ばす小便の飛沫でそこら中が濡れていた。ある時、友人の真似をして校内を裸足で歩きまわった僕は、トイレに行った際に小便の飛沫に濡れたすのこの板に裸足で立つことがどうしても出来ず、下駄箱に戻って上履きを履いてからトイレで用を足した。そのとき僕は少し自分を責めた。

今思えば、彼らが毎日同じ学生服を着ていたのは、丈夫な学生服なら夏用の霜降りの薄手を一着と冬用の黒の厚手を一着、その二着があればそれだけでなんとか一年間を過ごせたからなのだろう。真冬の北九州は雪が舞う日もあるほどで、関東や関西の人間が思うよりはずっと寒い。が、そんな日でも学生服の子供達は、せいぜい学生服の下にセーターや厚手の下着を着ただけで通学していた。彼らの学生服は毎日同じ一着を替えずに着るために、汗と鼻水と泥やその他の汚れがいたるところに付いてテカテカに光っていた。

荊田町の小学校では、小樽の小学校では既に行われていた学校給食がなく、子供達の昼食は家から持参の弁当を食べるか、毎日昼前に学校にくるパン屋から菓子パンを買って食べるかだった。菓子パンを買う子供は大体

いつも顔ぶれが決まっていた。おそらく母親が働いていて、時間的にも経済的にも毎日弁当を作って持たせるゆとりがなかったのだろう。そんな菓子パン組の生徒の中には、毎日ではないがパンを一個だけ買って、あとは水を飲んで腹を満たす子もいたようだった。

小樽市と比べた荊田町の貧しさは、子供達が乗る自転車にも現れていた。クラスの友達で、自分用のすなわち子供用の自転車を持っているのはせいぜい3~4人くらい。持っていない子供達は家にある大人用の25インチとか26インチの大きくて重い自転車に三角乗りで乗っていた。

三角乗りは右利きの子供なら、自転車の左側のペダルに左足を乗せ、サドルの下の三角形の空間に右足を通して右側のペダルに足を乗せ、その状態でペダルを漕いで走る乗り方である。自転車本体をやや右に傾け、ペダルを漕ぐ時には逆側のやや左に身体を傾けることでバランスをとる。いかにも不安定で危険そうな乗り方だが、実際にやってみるとそうでもなく、慣れるとその態勢で坂も上がるし、狭い田んぼの畦道も走れるようになる。

北海道の小樽市では仲の良い友達で自分用の子供自転車を持っている連中が結構いた。当時の小樽市はニシン漁と石炭の積み出しで栄えていたから、それが子供達の自転車にも反映していたのかもしれない。それに比べると、昭和30年代の荊田町は農家が多く、子供用の自転車を買えるほどに経済的なゆとりのある世帯は少なかったのではないだろうか。

そんな荊田町も今では衰退した市よりも人口が多く、商業施設も充実していて、賑やかで豊かな町へと変貌した。昭和30年頃の貧しい荊田町を自分の記憶として持っているのは、その時代に荊田町で暮らした経験を持つ、現在60代後半以降の、ざっくり言うと団塊世代以上の高齢者だけだろう。

圧倒的な美しさの荊田の夜空

すでに書いたように、昭和30年頃の荊田町は住民の暮らしとか商業施設などの面で決して豊かな町ではなかった。しかし自然環境や原風景的な農村景観という点では、子供時代の僕の記憶や思い出を彩る忘れられない町だった。そして8~9歳という当時の僕の年齢は、ようやく自分が目にした景色や光景を、まともな文章や言葉として記述することが出来るようになった年齢でもあった。であればこそ、荊田町は1年数ヶ月という居住期間の短さの割りに思い出深い町になったのである。

夜空を埋める満天の星もそうしたものの一つだった。

その当時、晴れた日の荊田町の夜空は、すごい数の星が天空を満たしていた。北海道小樽市の夜空も、東京と比べればはるかに多くの星が輝いていたが、荊田町の夜空の美しさ、壮観さはそんなものでなかった。もう別格というか比較にならなかつた。とにかく夜空全体が圧倒的な数の星や星雲で埋め尽くされ、その中央部に多数の星雲からなる帯状の天の川が横たわっていた。

父はしばしば僕に星や星座のことを説明してくれた。星空を指差しながら、『あれが北極星』、『あれが北斗七星』、『あれがカシオペア』、『あの赤いのが火星』などと教えてくれた。他にも『あれが牡牛座』とか『あれが獅子座』などと教えてくれたが、星座に関しては、正直言って北斗七星とカシオペア

以外のものは、どう想像力を働かせても僕にはそれが獅子や牡牛には見えなかった。

それでも晴れた日の夜に、頭を後ろに反らして、満天の星空を眺め回すのは苧田時代の僕のお気に入りの時間だった。星の数が数え切れないほどであっても、苧田の町外れの夜は、たまに近くの日豊線のレールをSLの夜汽車が物悲しい汽笛を鳴らしながら走る音や、わが家のそばを流れる小川の水音以外ほとんどなんの物音もしない静かな時間だった。

昭和31年の8月、僕は父親の転勤で今度はいきなり東京の杉並区に引っ越した。最寄り駅は中央線の荻窪だった。都心から見れば当時の荻窪はまだ郊外だったが、夜空の星は苧田町に比べるとお話にならないほど少なかった。東京に暮らすようになって観た最初の満天の星は、中学生時代に、渋谷の東急文化会館の最上階にあったプラネタリウムで見た星空が唯一無二のものであった。

苧田町で頭を反らせて満天の星空を眺めてから、いつの間にか63年もの歳月が流れた。その間、当時の苧田町の夜空に匹敵する本物の星空を観たのは、大人になってから行った、オーストラリア大陸のど真ん中の砂漠地帯にあるリゾート都市アリススプリングスの夜空くらいだ。それこそおびただしい数の星や星雲が天空を埋めつくし、しばらく眺めていると流れ星や移動していく人工衛星も見えた。満天の星空を観ていると、僕の心と意識はいつの間にか何十年も前の苧田町に飛んでいく。

<そうだ京へ行こう・古刹の花物語> (39)

大竹漢洲

哲学の道・若王子神社

東山山麓の古刹・永観堂の東北に位置する「若王子神社」は由緒ある神社です。永観堂・法然院・銀閣寺を目的として哲学の道を歩く人は、見過ごしてしまう神社です。永観堂を後に「若王子神社」に向かっています。しばらく歩き道を北に取ります。今、歩いて来た道は「哲学の道」ではなく、正式な国土地理院の地図には「鹿ヶ谷道」と書かれています。「哲学の道」は西田博士が称えた自称の“道”として考えていましたが、正式な道路名として登録されています。「哲学の道」は「鹿ヶ谷道」の一筋北側です。旅人の思い込んでいた道は、国土地理院の地図では「哲学の道」ではありませんでした。

鍵は疏水にありそうです。インクラインで導かれた疏水は幾筋に分流されて京都市内を流れています。その一筋は「琵琶湖疏水分流」として、南禅寺付近で東山の地下トンネルに潜り、再び分流が地上に現れるのが「若王子神社」手前の松ヶ崎浄水場です。浄水場は地下に設置されていて見えません。「若王子神社」に上る坂道の左側に、地上がコンクリートで覆われた土地があります。この地が浄水場でした。松ヶ丘浄水場で大部分が飲料水として浄水され、残り一部が「哲学の道」に沿った堀割に流され、京都の観光資源に役立てています。“京は水の都”です。この分流は銀閣寺の先は何処に流れていくのでしょうか?小さなことに気になる、陸路です。何れにしても堀割に沿

った「哲学の道」です。しかし“吾は吾なり人は人なり”です。

堀割に掛かった橋を渡れば、直ぐ「若王子神社」の境内です。若王子神社は「熊野若王子神社」が正式な社号です。「京都三熊野神社」の一社です。歴史は古く、後白河天皇が禅林寺（永観堂）の守護神として熊野権現を勧請して祈願所にしたのが始まりです。当時の神域には、新宮・本宮・若宮・那智が配置されていました。明治時代の神仏分離令で本宮一社のみが残され、ほかの社は全て希釈されました。

余談です。この神社の背後、東山には幾つかの滝が流れていました。不動を念じて滝に打たれて、心身を清める聖地でした。興味が惹かれるのは、滝壺には巨大な自然石があって、苔むして厳しく超自然的な絶対感を現していたと記録に残っています。懸命に周辺を滝と巨石を求めて歩き回りましたが、開発が進んでいたのも、痕跡も見当たりません。貴重な文化が失われて残念です。想像ですが、「那智の滝」と呼ばれていたかも知れません。歴史は面白い「哲学の道」に再び出ました。西田幾太郎博士の行動意識に思い至りました。“もしも“は歴史に禁句ですが、“もしも”博士が東山山麓に居住を構えて無く、“もしも“思考するに環境の良い散策路が無ければ、東山山麓に沿う「哲学の道」は存在していなかったかも知れません。平凡な「白川疎水分流の道」とでも名付けられていたに違いありません。現在は銀閣寺以南の分流は「白川疎水分流」と呼ばれています。白川疎水分流の行く末を地図で調べて確認してみました。高野川に流れ混んだ後、鴨川に注ぎ込み淀川から大阪湾に通じています。京都の河川の流れは不思議です。京都は“水の都”に恥じません。

余談です。この小路は、意外に思われるでしょうが、新しい道です。昭和45年に市民の憩いの道として開かれました。西田博士が生きていた頃には存在していません。「哲学の道」として信じて歩いている堀割の道の地下には、松ヶ崎浄水場から分流した水道管が敷設されています。夢が冷めますね！

西田博士は昭和20年6月に74歳で亡くなっていますから、「哲学の道」を歩くことは不可能です。伝説や歴史は後世の人々が捏造する事が多々あります。「哲学の道」もその一つです。

西田博士が散策した本来の「哲学の道」は、堀割を越えた山側の道です。細かいことが気にかかる性分です。この道は疎水分流と平行して、「靈感寺」から「銀閣寺」参道と続く古びた道（法然院通）です。

静かな散策路です。旅人も歩いてみましたが、観光客・学生の姿は全く無く、勿論、土産物屋も飲食店も一軒ありません。創作したり思考するには相応しい路で正に「哲学の道」です。

余談です。西田博士の生涯を調べてみると、意外な“歴史ヒストリー”が存在していて驚愕させられました。博士は家庭的に悲劇な人でした。博士が48歳の時、妻が脳出血で倒れ病床に着き、翌年には長男が腹膜炎で急死しています。更に3人の子供たちが次々に病に見舞われた挙句に、病床の妻は大正14年にこの世を去っています。この6年間は家族の不幸に襲われた博士でした。

散策は欠かしたことは無かったようです。思索のための散策では無く、自分に降りかかった不幸を正面から受け止める散策であったに違いありません。

子は右に母は左に床をなべ
春は来れども起つ様もなし

美しい水の流れに映る椿花、桜花、紅葉、雪竹の姿が、沈んだ博士の心を慰めたことでしょうか。博士の心境を慮れば「哲学の道」を詮索することは無意味です。“吾は吾なり人は人なり”です。

「哲学の道」には、人の心を捉えて離さない魅力があります。水の、流れる音、風のそよぐ音、鳥の囀る音、人が忘れていた音の数々の音が、疏水縁では聞こえてきます。桜樹の植えられた遊歩道は、疏水分流に沿うように大きく左右に曲がって続いています。淵に並ぶ満開の桜から一片二片と桜花が風に誘われるように舞いながら散っています。筏を組むように桜花は、流水に翻弄されて大きくなったり、小さくなったりして、後から後から絶えることなく追い越して行きます。

遊歩道のベンチで一休みも良し、対岸に架かる小橋の上で休むのも良し、コーヒーの匂いに誘われて休むのも良し、自然と親しみながら気儘に時を過ごせる所が「哲学の道」の大きな魅力です。良く手入れされた対岸の草花の鮮やかな色彩が春を感じさせてくれます。

ゆっくり石畳を歩いて下流に進んでいます。疏水の澱んだ水底には大きな緋鯉が数匹気持ちよさそうに泳いでいます。時折、餌と間違えたように、大きな口を開いて桜花を飲み込む仕草をしています。！

大豊神社

疏水分流の遊歩道を歩いて、下流に向かっても「哲学の道」の魅力は十分に満喫できますが、更に「哲学の道」を極めるには、分流一筋北の「木下（このした）道」を選んで、小体な神社・寺院を訪ね歩くことも魅力です。

最初に出会うのが「大豊神社」です。住宅地にある小さな社です。可愛らしい「狛ネズミ」の石像が迎えてくれます。全国に大小ある神社で、ネズミが狛になっているのは「大豊神社」しかありません。

古事記の故事に基づいています。ある時、大国主神が野火に囲まれて立ち往生していた時、現れたのが一匹の野ネズミ。野ネズミは洞穴を掘って大国主神の命を救い、お礼として狛ネズミとして、神社を火災から守るように託されました。神歴は古く宇多天皇が病氣平癒を願って連立したのが始まりです。来年（2016年）はネズミ年です。年末から人出が多いでしょうね。

余談です。「平家物語」に残る名高い「鹿ヶ谷の陰謀」が画策された処が、大豊神社の近辺でした。平家一門の打倒を目論んだ陰謀事件です。首謀した後白河法皇の関与は不問、西光は処刑、藤原成親は備前へ流罪、俊寛も薩摩鬼界島に流罪された大変な事件が平安末期に起きています。狛ネズミは全貌を聴き観て知っていますが、840年間も黙して語らず、です。

文化講座・講演会

奈良興福寺文化講座 2018年3月8日(木曜日)

午後5時半～6時半：第一講「興福寺の名宝-阿修羅と運慶の彫刻-」
興福寺国宝館長 金子啓明

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学)文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線
新宿駅3分)

第92回 新三木会講演会のご案内

1、日時・会場 2018年3月15日(木)13:00-15:00 如水会館

2『人口減少・高齢化と経済成長』 吉川 洋氏 立正大学経済学部教授
東京大学名誉教授 (元経済学部長)

3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com

TEL: 047-464-4063

フルネーム：一般・天地シニアネットワーク

会費：2000円 婦人1000円 学生無料

茶話会：15:15-14:20 千円 (自由参加)

4. ホームページ

<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

5. 予告

● 4月19日(木) 第93回 出口治明氏 立命館太平洋大学学長
『日本の未来を考えよう』

● 5月17日(木) 第94回 春名幹男氏

元共同通信ワシントン支局長

『気になる米国トランプ政権の行方』 (仮題)

事務局

<事務所移転しました。メールアドレス、住所は下記のようになります>

<振込先> 三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532

(口座名) テンチシニアネットワーク

< 配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。 >

天地シニアネットワーク・テーブル・466号

発行：2018年3月6日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

新住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-1
ライオンズプラザ町屋703
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電話・FAX・03-3819-7651
携帯電話(津田)：090-2534-1316